

大阪大学工学部生物工学系同窓会

尚醸会会報

第 26 号

大阪大学工学部

醸造工学・醗酵工学・応用生物工学・バイオテクノロジー（学科目担当）教室

同窓会

尚醸会バイオテクノロジーセミナー（同窓会）

本年度は対面形式と Web 配信を組み合わせた、
ハイブリッド形式での開催とさせていただきます。

開催日 令和 5 年 11 月 11 日（土）

開催方法 対面形式（吹田キャンパス、サントリー記念館メモリアルホール）および
オンライン（Zoom）のハイブリッド

プログラム

- 14:00 受付開始
- 14:30 総会
- 15:00 講演会（バイオテクノロジーセミナー）
- 15:00-15:45 新家 康弘 氏
日本テトラパック株式会社
スペシャリスト
（平成 15 年卒，平成 17 年修士修了）
「卒業 20 年かけて辿り着いた紙容器の世界」
- 15:45-16:30 柏木 明子 氏
弘前大学
農学生命科学部 教授
（平成 6 年卒，平成 8 年修士修了，平成 11 年博士課程修了）
「北東北での大学教員生活」
- 17:00-19:00 交流会
開催場所は吹田キャンパス内を予定しております。
交流会参加費 5,000 円

出席される方は、下記 1～3 のいずれかの方法でお申し込み下さい。

交流会参加の方は、2023 年 10 月 6 日までにお申し込み下さい。

1. 出席申込フォーム（URL: <https://forms.office.com/r/PbbtMqdAWg>）
（右記 QR コードからもアクセス可）
2. E-mail (doso@bio.eng.osaka-u.ac.jp)
3. 同封の用紙にて Fax または郵送

当日までに参加申し込み時にご記入いただきましたメールアドレスに Zoom の参加に必要な情報をお送りいたします。



出席申込フォーム ↑

目次

尚醸会副会長を拝命して	原島 俊	1
教室の最近の動向	村中 俊哉	3
各研究室の近況		4
教員紹介	青木 航	7
教員紹介	サティア・プラマ・プロト	8
<<同窓会通信>>		
尚醸会前会長 吉田敏臣先生のご冥福を皆様と共に祈ります	関 達治	9
吉田敏臣先生を偲んで	藤山 和仁	11
幼稚園から大学まで	梶山 慎一郎	12
The 京都、The 京都府立大学	高野 和文	13
令和4年度 尚醸賞の授与		14
令和4年度 工学賞を受賞して	砂 和樹	15
令和4年度 尚醸会バイオテクノロジーセミナー 報告	大橋 博之	16
令和4年度 尚醸会企画「社会人ドクターから話を聞こう！」開催報告	新聞 秀一	17
クラーク博士とそのひとこと	松田 祥吾	18
令和4年度 同窓会会計報告		
大阪大学工学部 醸造・醗酵・応用生物工学科同窓会「尚醸会」会則		
同窓会現組織・会員の動向		
●教職員の異動		
●会員訃報		
●令和5年3月卒業、修了生進路等		
●教室の構成		
●クラス会幹事		
会員各位		

尚醸会副会長を拝命して

崇城大学 特任教授 原島 俊 (昭和 47 年学部、49 年修士、52 年博士)

昨年秋の総会で副会長を拝命致しました原島 俊と申します。2015 年 3 月に大阪大学を定年退職し、4 月から、熊本にある崇城大学生物生命学部・応用微生物工学科で教育・研究に携わっておりました。この度、8 年間の勤務を終え 3 月末に定年退職致しました。しかし、引き続き、4 月から大学全体の研究力向上に貢献して欲しいという学長からの依頼で、University Research Administrator という名称の特任教授として勤務しています。授業や卒論指導の義務(逆に言いますと権利)はなく、空いた時間は自由に研究をしてもよいとのことで、本当に有難い毎日を送らせてもらっています。

さて、いずれの大学においても、同窓会への帰属意識が低い、会費を納めて入会をしてくれる卒業生の割合が低いという話を、そこここで聞きます。"それはなぜか"、の私なりに考えた理由を、この機会に述べさせて頂こうと思います。ひとは生まれて以来、人生を過ごしていくにつれ色々な属性とともに生きていくこととなります。生まれた時は家庭に、そして幼稚園、小、中、高、大学、人生の大半を過ごす職場等々、また、それぞれの時代においても、習い事の会等にも所属することでしょう。大学についてだけでも、大学そのものから、学部、学科(教室)、同期、理系であれば研究室、文系ではゼミ、学年を超えたクラブ等々色々な属性を持つこととなります。そうした色々な属性のうち、大学生生活を過ごしたひとにとって最も身近な属性のひとつは、尚醸会のような教室(学科)レベルの同窓会ではないかと思えます。同窓会は、言わば大学や学科と卒業生のパイプのようなものですから、運営に携わらせていただく副会長として同窓会の発展のために鋭意努力をさせていただきます。所存であることをまず申し上げます。

さて、会費を納めてくれない卒業生がかなりの数に登るという問題ですが、会費を納めてくれない卒業生でも、たまにはふらっとホームページを見ることもあるかと思えます。しかし、改めて、尚醸会のホームページを見てみますと、少々気になることもあります。まず、i) 卒業生の活躍情報がほとんどないように思えます。自身が卒業した学科の卒業生の活躍を発信することは教室(尚醸会)の価値を高めることにもなりますし、卒業生あるいは現在在籍している学生さんにとっても元気の出る話題ではないでしょうか。たまに会報に出ることはあるかもしれませんが、会報は 1 年に 1 回しか発行されませんので、ホームページで、気軽に、せめて 1 年に 3~5 名くらいのご紹介ができれば良いように思えます。次に、ii) 毎号となると大変かもしれませんが、いずれの企業や大学に何人くらいの卒業生が勤めているかの一覧があっても良いのではないかと思いました。そうした情報は、同窓生あるいは在校生にとって興味ある情報になるのではないかと思います。3 番目に、iii) 教室の現状は会報に記載されていますが、会報をクリックして見るのではなく、ホームページを開ければ、すぐに見ることができるようにならないかとも考えます。さらに、iv) 会長の関先生や、かつて幹事長でいらした金子先生が提案しておられるように、SNS を、同窓生間の交流の場として、もっと積極的に利用する仕組みを考えても良いかもしれません。既に、「大阪大学工学部 尚醸会」という Facebook のプラットフォームがありますが、個人的な色彩が強く、尚醸会と連動していないのではないかと思います。ホームページに URL の紹介や、尚醸会としての活用の

仕方についての説明があっても良いように思います。ここまでで申し上げたかったことは、会費納入と直接的な関連はないかもしれませんが、ホームページ発信機能について少々気になっていることです。さらに、v) 多くの大学で、本部による総会(同窓会)だけでなく、関東支部、関西支部、四国支部、九州支部などの支部活動(会合、懇親会)が活発であることも聞きます。尚醸会では、以前に、卒業生の大半が就職する関東圏の同窓会がありましたが、現在は活動休止しています。これも再開することが良いのではと思います。vi) 運営のテクニカルなこととしては、(小さいことかもしれませんが) 会費を支払う気になってくれた同窓生のため、コンビニでの支払い方式を採用するなど、簡略化、便宜化も必要かもしれません。

さて、冒頭で、いずれの大学においても同窓会への帰属意識が低いということを申し上げました。それはなぜでしょうか。学科の同窓会の存在意義として、同じ学科を卒業したことで、年齢を超え、心を開いて、異業種の人とも歓談や情報交換ができる縦のつながりと、同期卒業の横のつながりということがよく言われます。しかし、私には、縦のつながりを求めて同窓会に入る人は、そんなに多くいるとは思えません。特に、一定の年齢を超えたシニアでは、若い同窓生と語り合うことより、同期の集まりの方がはるかに気楽で楽しいものであることを否定する人はいないでしょう。もちろん、慶應大学三田会や早稲田大学稲門会(いずれも大学レベルの同窓会ではありますが)のように、ある種の実利的な機能も果たしている同窓会があることは承知しています。

私は、同窓会に会費を払ってまで入会しようと思ってくれる人は、自身が大学時代のある時期過ぎてきた出身の学科(教室)あるいは所属した研究室において楽しかった思い出や、人生におけるある種の懐かしさを覚えるからこそ、同窓会に入ろうと思うのではないかと想像します。出身の学科(教室)あるいは研究室に良い思い出が持てなかった卒業生は、会費を払ってまで同窓会には入ろうとはしないのではないかと思えるのです。もしその考えが正しいとすれば、同窓会に入るか入らないかの重要な分岐点は、その時在籍しておられた先生方が、良い思い出を持ってもらえるような教育をして下さっていたかどうかにかかっているような気がします。私自身、それができていたかどうかは不問に伏して、現教員の先生方には、ぜひ、このことを意識していただきたいと思っています。繰り返しですが、尚醸会に所属したい、出席して恩師や同期の友人に会いたいという気持ちは、実利的な何かによって起こってくるわけではなく、いつに学生時代に学び舎で良い思い出を持つことができたかどうかという"情緒的"なものに大きく依存しているのではないかと思う次第です。"同窓"とは、語源を辿れば、同一の師について学んだ友人たちを意味する"漢語"ということです。そういう意味では、最後に、他大学の出身でいらっしゃっても、縁あって教室の教員として在籍して下さっていた先生方にもぜひ同窓会に出席をしていただきたく思っています。

教室の最近の動向

生物工学専攻 専攻長 バイオテクノロジー学科目 学科目長 村中俊哉

2023年度の専攻長（大学院）、学科目長（学部）を拝命しました村中俊哉です。2020年の初めからの新型コロナウイルスにより、本学での教育研究は多大な影響を受けてきました。今年度に入りようやく平常の教育・研究ができるようになってきましたが、コロナ対策で始まったオンライン会議、ハイブリッド授業などを盛り込みながら教育研究活動を行っています。大学院の専攻再編により生物工学専攻として4年目、学部も応用生物工学科目からバイオテクノロジー学科目に名称変更して3年目になり、わたしどもの「生物工学」あるいは「バイオテクノロジー」の名称が学内外に定着したものと考えます。

昨年5月に准教授に昇進したSASTIA PRAMA PUTRI先生が、2023年1月に総長裁量ポスト配分され、新たにグローバル・フードアグリテック領域を担当するとともに、4月には、青木航教授が着任され微生物機能工学領域を担当することとなり、生物工学専攻では、現在で、教授7名、准教授7名、助教4名が在籍しております。

さらに、専攻の教員に加え、専任教員として、生物工学国際交流センターの5名、情報科学研究科バイオ情報工学専攻の6名、産業科学研究所フォトニックバイオテクノロジー研究室の4名、そして蛋白質研究所蛋白質結晶学研究室の3名が加わり、これらの専任教員が協力して、バイオ関連研究室グループ（以下、教室）として、学部、大学院での教育研究を行っています。当教室には、専任教員に加えて、令和4年度は特任教員15名、招へい教員数は日本人教員が24名、外国人教員が1名、特任研究員22名、技術職員1名、さらに多くの技術補佐員ならびに事務補佐員が在籍し、教育・研究に関与しています。産学連携では、3つの協働研究所、7つの共同研究講座（うち2つが今年度から）、1つの寄附講座も当教室と密接に活動いただいています。

学生につきましては、現在当教室には、英語コース所属の大学院生を含め、博士後期課程69名（日本人42名、英語コース27名）、博士前期課程134名（日本人107名、英語コース27名）、学部研究室配属学生66名が在籍しております。さらに、学部2年次の分属では昨年度に続き、バイオテクノロジー科目が応用自然科学科で学生に人気が高い学科目となり最終的に61名が分属されました。

国際交流、留学生交流につきましては、以前から継続している生物工学専攻における博士前期後期課程のバイオテクノロジー産学共創グローバル人材育成特別プログラム（通称：英語コース）では一昨年度に採択された国費優先配置枠での大学院教育を進めるとともに、博士前期課程のダブルディグリープログラム（DPP）においてもますます充実した活動となっております。

気候問題、世界情勢などますます混沌とした時代となっておりますが、健康、環境、食糧といったグローバルかつローカルな問題解決に、私たち教室メンバーならびに卒業生が関わることがますます大きくなるとともに、責任も増していると感じます。

今後とも当教室に多大なご支援のほど何とぞお願い申し上げます。

各研究室近況報告

【生物資源工学領域】2023年度の福崎研は学部生6名、研究生1名、修士13名、博士16名とスタッフを合わせた合計52名のラボになりました。留学生は10名おり継続して国際的なラボになっています。また、福崎研の3本柱である、国際交流、産学連携、男女共同参画の一環として女性教授1名が本年度も引き続きクロスアポイントメント制度で在籍しており、4月より Sastia Prama Putri 准教授がグローバル・フードアグリテック領域を主宰することになりました。2021年度より続く工学研究科テクノアリーナ最先端研究拠点である「福崎フロンティア産業バイオ連携拠点」の活動も活発に行われており、これまで以上に食品に関する研究を行っています。コロナについては、5月に5類への引き下げがなされたため、face-to-face と hybrid 形式を併用して、学生が発表をする機会を積極的に設けています。お近くにお越しの際は、是非福崎研にお立ち寄りください。

【生命環境システム工学領域】渡邊研ではコロナ禍の影響で何名かの学生が留学を断念したことと、ちょうど博士号を取得した学生が数名いたことから、急に留学生数が減少してしまいました。これは予想外のことでしたが、逆に小回りがきくようにもなりましたので、新たな体制で望みたいと思っております。昨年度は博士前期課程2年の平野啓太さんが第45回日本分子生物学会年會にて「Science Pitch AWARD」を受賞し、英語コース卒業生の Pijar Religia さんの論文が、アメリカの環境毒性化学会の学会誌 Environmental Toxicology and Chemistry 誌において Top 10 Exceptional Papers of 2021 及び 2022 Best Student Paper に選出されました。私達の研究室のキーワードは生命と環境ですが、SDGs のことばを借りるまでもなく、これはこれから更に重要性を増していく領域だと考えており、今後も積極的に研究を広げてまいります。

【高分子バイオテクノロジー領域】2023年度の内山研は、鳥巢准教授、山口助教、そして、特任教員、特任研究員、研究補佐員、秘書、招へい研究員などのスタッフが全部で24名、学部生7名、博士前期16名（うち留学生2名）、博士後期15名（社会人5名）の合計62名の研究室でスタートしています。主な研究テーマはバイオ医薬品や遺伝子治療ウイルスベクターの品質管理、分析と製剤、食品の物性と機能性の解析です。ウイルスベクターの製造にも取り組んでおり、培養、精製、分析、製剤、と一貫した研究が実現しています。研究成果は数多く得られており、海外での研究成果発表も学生も含めて本格的に行っており、遺伝子治療の分野でも私たちの研究成果が引用されるようになってきました。大学発の科学技術を社会に確実に還元できるように更に頑張りたいと思います。

【細胞工学領域】2023年度の村中研は、学生・教職員を合わせて総勢32名となります。新型コロナウイルスの影響によりここ数年開催できていなかった研究室行事（歓送迎会やラボ旅行など）についても、感染対策を施した上で実施できるようになってきており、ラボの活気が復活してきています。研究については、植物の特化代謝に関わる研究を日々進めています。発表された研究成果は研究室ホームページに掲載しますので、ぜひ確認してみてください。また、近くにお越しの際は、ぜひ顔を見せに研究室にお立ち寄り下さい。

【生物プロセスシステム工学領域】本領域は、本年6月末現在、教員3名（紀ノ岡、金、山本）、特任教員・研究員などで51名、学生34名と、大所帯かつ国際的な研究室となっており、新たな学問体系「細胞製造性」を軸とし、社会実装に向けた産官学連携にて活動しております。細胞製造コトづくり拠点の活動としても、6月末現在、1つの協働研究所および5つの共同研究講座（10月からは新たな2つの共同研究講座が加わる予定）と連携して、細胞製造に関するコトづくりを邁進しております。

【生物化学工学領域】発足9年目は、大政教授、山野准教授、学部6、修士20、博士9、招へい・特任教員/研究員とスタッフで5か国46名です。HPも改訂しました (<https://biochemicalengineering.jp/>)。大政先生は、大阪大学総長補佐（教育オフィス）、工学研究科副研究科長・教育学務国際室長（教務委員長）として全学/研究科の教育全般に携わり、客員教授（神戸大）、Asian Federation of Biotechnology (AFOB) 会長、日本動物細胞工学会会長、JBA バイオエンジニアリング研究会会長・理事、MAB 組合 PL も務めています。AMED- 国産細胞 PJ（統括 PL 大政）、AMED- 革新的な次世代抗体医薬品製造技術の開発（PI 山野）、遺伝子治療製造 PJ（PL 大政）、NEDO、科研基盤 A（大政）、C（山野）と研究 PJ も充実しています。近くにお越しの際は是非お立ち寄り下さい。

【微生物機能工学領域】当領域は2023年4月に新たに設置されました。現在、スタッフ1名、指導委託学生3名（博士前期2名・博士後期1名）、研究員1名の総勢5名で研究室立ち上げに奔走しております。新4回生の配属は来年度から始まる予定です。当研究室では、微生物学・分析科学・オミックス科学の枠組みを拡張し、微生物が持つ極めて多様な機能を分析・再構成・応用することで、食を始めとしたさまざまな産業の課題を解決していきたいと考えています。次世代を担う人材の育成と、微生物を起点とした革新的バイオテクノロジーの創出に向けて努力して参りますので、今後とも皆様のご支援を賜れますようどうぞよろしくお願い申し上げます。

【バイオ情報計測学講座】バイオ情報計測学講座では2023年の3月には三期生が無事に卒業するなど、活動を本格化させています。現在は、教授：松田史生、准教授：岡橋伸幸、助教：清家泰介の布陣で応生の学部教育を担当しております。2023年度は学部生6名を迎え、修士10名、博士3名、スタッフ7名の計26名（6月現在）の布陣でバイオテクノロジーを基盤に生物、計測、情報を融合した研究を活発に進めてまいります。学生、スタッフが協力してCOVID-19の対応を実施し、2022年10月の生物工学会大会には、多くの学生がオンライン参加し、研究成果を発表しました。2023年からは新年会、送別会、新歓等を実施できるようになり、一層仲良く、日々の研究を続けてまいります。

【代謝情報工学研究室】令和5年度は学部生6名、修士11名、博士4名、スタッフ7名の合計28名のラボとなりました。昨年度は戸谷准教授が日本生物工学会 生物工学奨励賞（照井賞）、赤木駿斗君（D1）が日本生物工学会 関西支部学生優秀賞を受賞しました。新型コロナウイルスの状況も落ち着きつつあり、研究室内セミナーやディスカッションが対面形式になり、研究活動も平常に戻りました。基盤S、基盤C、挑戦的萌芽の科学研究費補助金の研究、その他共同研究が様々進

行中です。今年度から対面での国内外の学会が増えており、様々なところで研究発表や皆様との交流を楽しみにしております。近くにお越しの際は是非お立ち寄りください。

【応用微生物学領域】本年度は学部4回生が6名、修士課程学生が17名、博士課程学生が9名、技術補佐員1名に、スタッフ3名の合計36名の体制で運営しています。国際色豊かな研究室で、日本人学生を含む7カ国に及ぶ学生が明るくアットホームな雰囲気のもと共同、協力して研究活動を行っています。昨年度に行われた修士1年生の中間発表では優秀発表賞（日本人1位～2位）を受賞する結果となり、研究においても充実した成果を残しています。コロナにより影響を受けていた短期研究員、留学生の受け入れや研究室行事に関しても少しずつではありますが復活してきています。研究室活動の様子も「藤山研通信」にて頻りにアップデートしていますので、是非ご覧ください。

【分子微生物学領域】木谷 茂先生の後任として2022年10月に着任された富田宏矢准教授を含め、スタッフ7名、学生26名（短期留学生を含む）の体制で新年度を迎えました。昨夏以降、短期交換留学プログラム（通称SSSVプログラム）やJST さくらサイエンスプランなどの国際交流活動も再開し、慌ただしい日々を過ごしています。研究室セミナーの対面開催や新歓パーティーなども再開し、コロナ以前の日常を取り戻しつつあります。また昨年の研究室対抗ソフトボール大会（山田杯）では本田研発足後初めてとなる優勝を果たしました。科研費国際先導プログラムにてアーヘン工科大学との共同研究を開始するなど、研究でもさらなる活性化と国際化を進めています。

【蛋白質結晶学研究室】3月に生物工学専攻として最初の院生3名が立派な修論発表を行い、うち1名は博士後期課程に進学しました。年次進行で院生の所属が工学研究科生物工学専攻所属に切り替わっていき、4月現在では工学部・工学研究科所属の学生の割合の方が以前からいる理学研究科所属の学生より多くなりました。専攻所属の留学生も3人となり、少しずつラボの国際化も進んでいます。今年4月からは、栗栖を代表とする学術変革領域（A）「光合成ユビキティ」がスタートしました。応用自然科学科および生物工学専攻の学生さん達とともに、専門性の高い研究を推し進めて、大阪大学からオリジナリティの高い研究を発信していきたいと考えております。引き続きご支援のほど宜しくお願い申し上げます。

【麹菌育種工学寄附講座】当寄附講座は公益財団法人発酵研究所からの寄附講座助成により、2021年10月に発足しました。2年目の運営となり、麹菌の株によるゲノム情報の多様性と共通性について実験データと関係づける作業を進めています。寄附講座教授：楠本（憲）、寄附講座講師：酒井、寄附講座助教：田中、招へい教授：石田（月桂冠株式会社）、招へい准教授：眞岸（ヒガシマル醤油株式会社、7月就任）、特任研究員：劉、事務補佐員：楠本（由）の体制で研究を進めています。昨年度から継続して5月に酒井が学部学生実験を指導しました。昨年11月に開催の糸状菌分子生物学コンファレンスで酒井が企業特別賞を受賞しました。また、企業や大学、国立・公設研究機関との共同研究を実施中です。お近くにお越しの際はぜひお立ち寄りください。

教員紹介：微生物機能工学領域着任のご挨拶

生物工学専攻 微生物機能工学領域 教授 青木 航

2023年4月に、生物工学専攻 教授に着任しました青木 航と申します。日本においてバイオテクノロジーを牽引してきた本専攻において、新しく微生物機能工学領域を立ち上げるという貴重な機会を頂き、謹んでお礼申し上げます。本専攻の伝統と実績を継承しつつ、さらなる発展に貢献できるよう教育・研究に全力で取り組んで参りますので、尚醸会の皆様におかれましてはご指導・ご鞭撻を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

私は、青森県立青森高等学校を卒業後、2004年に京都大学 農学部 応用生命科学科（旧 農芸化学科）に入学しました。その後、2007年に植田 充美 研究室に配属し、植田教授と森坂助教から研究指導を頂きました。植田研究室では、当時大きく発展しつつあったオミックス科学を用いて、日和見病原性真菌 *Candida albicans* の病原性を理解して新たな抗菌戦略を提案する研究に取り組み、2013年に博士（農学）を取得いたしました。植田研究室では、微生物の機能を深く理解して社会課題を解決可能な技術を開発するための方法論を学ばせて頂き、今に繋がる礎を築けたと考えております。博士学位取得後、学術振興会特別研究員 PD として大阪大学 精密科学・応用物理学専攻 民谷 栄一 研究室にお世話になり、フォトンクスやナノテクノロジーなどの最先端技術を駆使して生命現象を理解する研究に取り組みました。その後、出身研究室である京都大学 植田研究室に助教として着任し、微生物学・オミックス科学・データサイエンスを融合しつつ、微生物の機能を社会課題の解決に役立てようと試みてきました。2023年4月より、本専攻にて微生物機能工学領域を立ち上げる機会を頂き、ポストドク時代を過ごした思い出深い吹田キャンパスにて教育と研究を加速させるためのセットアップに取り組んでおります。

大阪大学では、2つの目標を据えて研究室を運営していきたいと考えています。第1の目標は、世界トップレベルの研究能力を持つ学生を多数輩出することです。私自身、諸先輩方のご支援のお陰で大きく成長することができ、そのご恩を後進に返していくことこそが重要な使命であると考えています。第2の目標は、社会をより良くするためのバイオテクノロジーを開発していくことです。誰もが安心して暮らせる社会はまだまだ遠く、人類社会には多数の問題が残されています。私は、分析科学・オミックス科学の枠組みを拡張し、微生物が持つ極めて多様な機能を分析・再構成・応用することで、食を始めとしたさまざまな産業の課題を解決していきたいと考えています。今後とも皆様のご支援を賜れますようどうぞよろしくお願い申し上げます。



近影 南紀白浜 三段壁洞窟にて

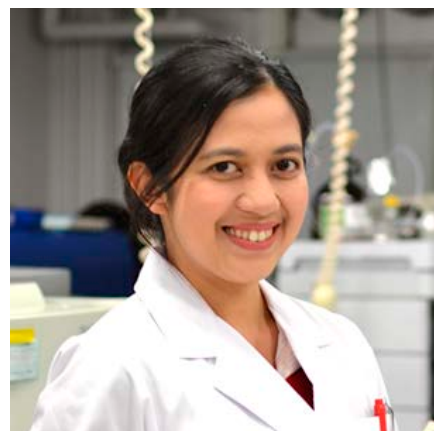
教員紹介：グローバル・フードアグリテック領域からのご挨拶

生物工学専攻 准教授 サスティア・プラマ・プトリ（平成 22 年英語コース卒）

2023 年 4 月、私は大阪大学大学院工学研究科生物工学専攻の正規職准教授に就任し、グローバル・フードアグリテック領域（Sastia Putri 研究室）を立ち上げました。これまで、恩師である福崎英一郎教授に師事し、同講座専攻の生物資源工学領域研究室に従事しました。私が 2011 年に特任研究員として同研究室で働き始めて以来、私を科学者として成長させてくださり、日本のアカデミア、特にメタボロミクス分野での私のキャリアを継続的にサポートしてくださいました。同研究室の新聞准教授と共に、たくさんのエネルギッシュな学生を抱える大きな研究室をどのように運営し、また、メタボロミクスの様々な分野への応用についてエキサイティングな研究をどのように展開していくのかを学びました。

私が初めて日本に来たのは 19 年前、インドネシアのバンドン工科大学の学部を卒業した後でした。大阪大学の ICBiotech が主催したユネスコ・バイオテクノロジー大学間共同研究プログラムで研究員として来日し、後に文部科学省奨学金の英語コースで修士・博士課程の指導教官となった故・仁平教授のもとで研究を行いました。私の専門は応用微生物学であり、大学院での研究を通して分析化学に慣れ親しむようになりました。メタボロミクス分野の研究を始めた当初は、メタボロミクス技術を応用して、高付加価値化学物質の生物生産に重要な有用微生物の菌株改良に取り組んでいました。JST-NSF の研究プロジェクトに参加し、米国の研究者と知り合いになり、国際共同研究のマネジメントを学びました。2014 年には、大阪大学の研究交流・教育ネットワーク推進センター（CAREN）プログラムに参加し、アジアのパートナー大学とのダブルディグリープログラムの立ち上げに携わりました。この経験は、グローバルな研究者としての地位を確立するために大いに役立ちました。この貴重な経験は、アメリカ、イギリス、ドイツ、インドネシア、シンガポール、タイ、フィリピンのさまざまなパートナーと新たな研究協力関係を築き、グローバルネットワークを形成するに至りました。私は特に、コーヒー、カカオ、様々なトロピカルフルーツ、母国インドネシアのユニークな発酵食品など、重要な熱帯生物生産物の品質向上のためのメタボロミクス技術の応用に興味がありました。最新の分析アプローチと多様性の高い生物資源を組み合わせることで、多くのエキサイティングな研究テーマを掘り起こし、新たな可能性を引き出すことができます。また、私たちは優秀な学生に恵まれ、そのおかげで日本生物工学会の斉藤賞（2022 年）、メタボロミクス学会の会長賞（2020 年）、大阪大学賞（2018 年）、ロレアル賞女性科学者賞（2015 年）、などから研究奨励賞をいただくことができました。

外国人かつ女性研究者として初めて当部門で研究グループを立ち上げたことは、今でも夢のようです。今後益々精進し、精一杯頑張りますので、尚醸会の皆様、今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。



尚醸会前会長 吉田敏臣先生のご冥福を 皆様と共に祈ります

尚醸会々長 関 達治 (昭和 42 年卒)

尚醸会前会長の大阪大学名誉教授・吉田敏臣先生が令和 5 年 4 月 28 日にお亡くなりになりました。享年 84 才でした。ご葬儀は 5 月 1 日に、新型コロナウイルス感染拡大防止のため家族葬で執り行われました。参列はかないませんでしたでしたが、尚醸会からはお花をお贈りさせていただきました。

ここに改めて皆様にご報告し 皆様と共に先生のご冥福を心からお祈りしたいと思います

吉田敏臣先生は第 2 次世界大戦さなかの昭和 14 年 (1939 年) 6 月 20 日に兵庫県でお生まれになりました。昭和 34 年 (1959 年) 4 月に大阪大学工学部醗酵工学科 (現在の生物工学専攻) に入学され、卒業後、大学院修士課程、博士課程に進学され昭和 43 年 (1968 年) 3 月に工学博士を取得されています。私事ですが、先生が大学院在学中に学生実験でカビの通気攪拌培養時のペレット形成課程の観察をお手伝いしたことを思い出しました。当時、醗酵工学科では、微生物による物質生産をより化学工学的立場から理解すべく色々な試みがされていました。

先生は、博士課程修了後、昭和 44 年 (1969 年) に大阪府立大学工学部に助手として奉職されましたが、2 年後の昭和 46 年 (1971 年) 6 月には助手として大阪大学工学部に戻られました (その後の役職は別表に示しました)。その後、田口久治教授と一緒に微生物プロセスの速度論的解析に基づいて得られる決定論的モデルを用いるシミュレーション技術の展開に関する研究を多角的に行なわれました。更にそれらモデルを用いたシミュレーション技術の展開に関する研究と培養操作の最適化に関する研究を行われるとともに新しい生物プロセスの工学的解析と利用に関する研究分野を確立されました。先生の学術分野の功績は高く評価され広く知られており、その結果として日本生物工学会の最高賞である「日本生物工学会賞」を平成 14 年 (2002 年) に受賞されたことは皆さんご存じのところ です。また、平成 17 年 (2005) には APBioChEC-05 をアジア太平洋生物学会議から授与されたのはご存じのとおりです。

前後しますが、周知のとおり醗酵工学科 (現生物工学専攻) では早くから国際的な活動に力を入れていました。昭和 48 年 (1973 年) にはユネスコと文部省のサポートを得て微生物学国際大学院研修講座が開講され、微生物工学を目指す多くの東南アジア研究者の育成を、学科を挙げて実施されました。この活動成果をもとに昭和 53 年 (1978 年) には工学部附属微生物工学国際交流センターが設置され、昭和 63 年 (1988 年) には微生物から広く生物を対象とした専門領域にシフ





タイ王国マハ チャクリ シリントーン王女からマヒドン大学理学博士号を授与される吉田先生（写真掲載可を確認済み）

トするため生物工学国際交流センターと改称され、更に平成7年（1995年）には全学組織に改組されました。国際交流センター設置後は、活動を広げてタイ、シンガポール、インドネシアなどと日本学術振興会による大型研究プログラムが立ち上げられ、吉田先生は活動の先頭に立って研究者交流・留学生の教育・研修プログラムを遂行されました。その流れは現在までも続き、今や外国人研究者や留学生が普通に研究する専攻になっているのはご承知のとおりです。タイバイオテクノロジー学会創立支援など、先生のタイの大学における研究・教育へ貢献により、平成17年（2005年）にはタイ国マヒドン大学名誉理学博士学位がシリントーン王女から吉田先生に授与されました。

なお、平成14年（2002年）から1年間は、新設の情報科学研究科に新たな生物工学関係の講座を開設するために室岡義勝教授とともに移籍され、現在の基盤を確立されました。

吉田先生のもう一つのお姿はテニスコートにあります。まだ工学部が大阪市都島区にあったころ、先生の所属する田口研究室はテニスが盛んで、吉田先生もご多分に漏れずテニスコートで頑張っておられました。このように学生を大切にする先生のもとに多くの学生が集まったのは当然かも知れませんが、卒業生の皆様の多くも未だ思い出が多いと思います。その他、京都北部の網野への蟹食い旅行、夏の海への講座旅行などなど色々な思い出があります。もう先生と昔話ができないのは本当に残念なことですが、吉田先生の色々な思い出を、同窓のみなさんと共にいつまでも胸に残したいと思います。

最後に、改めて皆様とともに、先生のご冥福をお祈りしてご報告を締めたいと思います。

吉田敏臣先生の主な職歴・大学外職歴

昭和44年3月	大阪府立大学工学部助手
昭和46年6月	大阪大学工学部助手（醗酵工学科）
昭和53年6月	大阪大学工学部附属微生物工学 国際交流センター助教授
昭和60年4月	大阪大学工学部附属 生物工学国際交流センター助教授
昭和63年4月	大阪大学工学部附属 生物工学国際交流センター教授
平成7年4月	大阪大学生物工学 国際交流センター長・教授
平成11年4月	日本生物工学会会長 （～平成13年3月）
平成14年4月	大阪大学情報科学研究科教授 （配置換え）
平成15年3月	大阪大学定年退職
平成15年4月	日本学術振興会 バンコク研究連絡センター長
平成19年4月	大阪府環境農林水産総合研究所 所長（平成24年3月退職）
令和5年6月	従四位を勅授され瑞宝中綬章が授与



テニスコートの吉田先生 右は奥様
左は岡本徹さん（現順天堂大・院・医学研究科教授）

吉田敏臣先生を偲んで

生物工学国際交流センター 藤山和仁（昭和 59 年度卒）

吉田敏臣先生が御逝去されました。謹んで先生のご冥福をお祈り申し上げます。

私は、醗酵工学科博士後期課程 2 年生で岡田弘輔研究室を中退し、1988 年 4 月に生物工学国際交流センターに採用され、教授・吉田先生、助教授木下晋一先生・関達治先生、助手岸本通雅先生の体制に加えていただきました。

工学研究科醗酵工学専攻（現、生物工学専攻）を含む「ALL 大阪大学」の力を結集され、アジアのバイオテクノロジーの教育・研究に非常に多くの貢献をされました。特に、1974 年から始まったユネスコ微生物学 国際大学院研修講座や、1978 年から拠点大学方式による東南アジア諸国との二国間学術交流など、半世紀も前からアジア地域のバイオテクノロジーを牽引されてきました。先生の視点は大きくかつ深く、あるべき姿をいつも話されていました。2016 年 7 月にフィリピン・イロコス市のビガン市で開催された The Philippine Society for Microbiology 主催の 7th Asia Pacific Biotechnology Congress、45th Annual Convention and Scientific Meeting に一緒に参加させていただきました。上記の国際共同研究・教育プログラムに参加経験のあるフィリピンの方々が絶えず先生の周りに集まり、大変尊敬されていることがわかりました。この学会出席が、先生の最後の海外出張だったと思います。

先生はいつも提出のギリギリまで書類の推敲をされていました。また、毎晩遅くまで仕事をされていました。当時はオフィスで喫煙できましたので、タバコを口にくわえ、PC に向かって書類を作成されている先生のお姿を思い出します。生物工学国際交流センターは、私が着任してから大きな改組をしております。大変な作業だったことと思います。

吉田先生は学生から「よっさん」と呼ばれ、慕われていました。研究室発表会でのサイエンスに対する指導は厳しかったです。研究室パーティの場においては、学生と食事をし、またよく日本酒を飲まれていました。地球規模の留学生に囲まれ、国際的な環境で研究を推進され、また、御忙しいスケジュールの中、研究室旅行にも参加してくださっていました。学生時代はテニス部に所属されていたので、ラボのテニス大会でも活躍され、私たちはいつも振り回されてボールを追いかけていました。

アジアのバイオテクノロジーの教育や研究の推進と発展を考えると、大きな存在を失いました。アジアの経済発展とともに、各国のバイオ研究は成長していくと想像します。吉田先生が蒔かれたバイオの種子は芽を出し、それぞれの社会事情に沿って生長しています。大阪大学にいる私たちはここで留まっているわけにはいきません。今後も工学研究科生物工学専攻などと協力しながら、アジアの国と我が国がお互いにウィンウィンの関係にあるように発展していけるように努めてまいります。私たちが鼓舞激励ください。

幼稚園から大学まで

近畿大学生物理工学部 教授 梶山慎一郎（旧教員）

皆さんこんにちは。15年余り前まで応生で助手としてお世話になりました梶山です。当時皆さんと（お世辞にもきれいとは言えない）研究棟で実験をしていたころを大変懐かしく思い出しています。現在私は和歌山にある近畿大学生物理工学部で勤務しています。このたび、尚醸会のお計らいで機会をいただきましたので、近況と近頃私が考えていることを少し書かせていただきたいと思います。

阪大に在籍していた当時と異なり、現在は蘚苔類（特にゼニゴケ）の精子誘引物質の同定や植物微生物間に作用するアレロケミカル、マンゴーや柑橘類等の果樹からの機能性成分の探索といったオーソドックスな天然物の「物取り」を行っています。近年の生物化学の進歩は著しく、トレンドもだいぶ変わってきて、地味に「物取り」を行う研究者は少なくなってきましたが、物質を取り扱う技術、化合物の構造を正確に解析する技術、そして生物間相互作用にかかわる物質についての知見を得る事はこれからも重要だと考え、学生さんのスキルアップも兼ね、地味に研究を進めているところです。見つかってくるのはほとんど既知物質ですが、生理活性の面でみると新たな発見もあり、楽しく研究させていただいています。そういえば先日、阪大時代に同じ小林研で助手仲間だった岡澤敦司先生（現大阪公立大学 准教授）が研究室に来てくれました。実は、当研究室の卒業生が岡澤先生の研究室の院生になり、現在共同研究を進めています。岡澤先生とも、天然物、特に他感作用に関わる物質や知識は今後 SDGs を考慮した農業や環境保全に役立つバイオコントロールの手法として再び脚光を浴びる日が来るのではと話しました。

一方、研究以外の面では 2018 年 10 月から 2022 年 9 月まで所属学部で学部長を務めさせていただきました。この間あまり研究できなかったのですが、大学を取り巻く環境や、大学教育の意味等を考える良い機会となりました。ご存じの通り、現在 18 歳人口は減少の一途をたどっており、どこの大学でも学生の確保とレベルの維持に必死です。また、情報社会が進み、（それが原因かどうかはわかりませんが）学生さん達の気質もだいぶ変わってきました。近年は常識的で素直な学生さんが増えたと思う反面、既存の知識や手法に対し疑問を持つ学生さんはめっぽう少なくなったように感じます。例えば、キットやプロトコルに用いられている試薬や機器の動作原理について詳しく知りたいと思う学生さんにはめったにお目に掛かりません。ただ、進歩が著しく様々な情報や手法が簡単に手に入る現代においては、ブラックボックスを許容し、これらの組み合わせで物を考えられるというのも一つの能力かなと思ったりもします。どちらにせよ生物現象を面白いと感じ、なぜだろうと疑問を持つことは、自然科学の研究を進めていく上で重要なモチベーションであることに変わりはありません。私事ですが、両親が高齢となり、昨年から家業の私立幼稚園の運営に関わるようになりました。子ども達と接していると、知らず知らずのうちに「どちて坊や」を探している自分がいます。彼らの純粋な好奇心をそのまま育てられたらいいなと思う今日この頃です。

The 京都、The 京都府立大学

京都府立大学 高野和文（旧教員）

私は 2002 年 4 月から 2011 年 3 月までの 9 年間、金谷茂則先生が担当されていた極限生命工学講座（物質・生命工学専攻 / 生命先端工学専攻）の助手・助教授 / 准教授として、この生物工学系教室と関わらせていただきました。私自身、ここの卒業生ではなく（阪大理 / 蛋白研の出身）、また基幹講座の所属でもなかったのに、教室への貢献は少なかったかと思います。ただ、理学から工学に来て違う世界を知り、自由に研究をさせてもらい自分の研究スタイルを構築することができた 30 代であり、今思うと非常に有意義な 9 年間であったと改めて感じます。金谷先生をはじめ、教室の先生方には感謝の気持ちでいっぱいです。



2011 年に京都府立大学に異動しました。大阪の寝屋川で育ち阪大に行って、結婚後は現在も吹田に暮らしていますが、40 歳にして、とうとう“京都”に足を踏み入れました。府大の教員の多くは、京都出身・在住や京都の大学出で、京都での生き方を知っておられます。私としては多少は覚悟をしていましたが、本音を言わない、荒波を立てない、正規の会議では決まらないが裏で決まっている、前例を重視、冗談の不理解、等々に、まさにそう！と思う場面があり、京都に来たな、と思う日々でした。初めのころは、しばしばカチンと来てましたが、最近ではすっかり染まってきたような・・・。

府大に来て私が導入したことは、①私の担当の学生実験では、「できるまで帰れません」。阪大でもやっていたタンパク質の安定性実験ですが、こちらではきっちりとした変性曲線が得られるまで何度でもやってもらってます。一発で合格すれば夕方に帰れますが、何度もやると朝まで・・・。昨年も遅い学生は朝の 6 時過ぎまでかかりました。もちろん私も付き合いますが、特に操作に口出しはしません。自分でやり遂げてもらいます。②私のラボのゼミでは、「一人の発表に対して全員質問をする」。人数が多いと時間はかかりますが、寝ない、理解する、質問の習慣がつくなどの効果があるでしょうか。また発表者もいろいろな質問に対応する能力が必要になります。③学科の卒論発表では、「発表 10 分、質疑無制限」。一人大体 30 分で 40 名弱、丸二日間、教員もヘトヘトです。でも、教員だけでなく学生 / 院生もいっぱい質問して、それに答える 4 回生は大きくに成長する感じがあります。いずれの事例も私自身の体力気力も必要で、衰えないよう続けていければっ！（①はこのご時世、どこかで止められるかも・・・）

研究の方は、引き続きタンパク質の構造物性を中心に進めていて、最近ではタンパク質の分子進化をやっています。また、結晶絡みで、医薬品化合物の多形制御もやり、初めてタンパク質以外の論文を出しました。さらには、尿路結石にも手を出しています。これからも型にはまらず、自由に研究を展開できればと思っています。

令和4年度尚醸賞の授与

工学部応用生物工学コースの成績優秀者の努力を讃え、2023年3月23日に大阪大学サントリー記念館メモリアルホールにて、尚醸会を代表して会長の関達治先生より尚醸賞が授与されました。受賞者の皆様の今後の益々のご活躍を期待しています。

尚醸賞受賞者のコメント

砂和樹さん

この度は尚醸賞を受賞することができとても嬉しく思います。素晴らしい友人や、先生方、家族のおかげでこのような素晴らしい賞を受賞できました。4年間の最後にこのような形で評価していただいたことをとても嬉しく思います。このような名誉に恥じぬよう、より一層精進を重ねていきたいと思えます。

空田和也さん

この度は尚醸賞を頂き、光栄に存じます。先生方や友人、家族など多くの人に支えられながら自己成長に向けて努力した結果をこのような形で評価していただいたことを大変嬉しく思います。賞をいただいたことを励みに、今後も支えてくださる方々への感謝を忘れることなく日々精進してまいります。

巽慶太郎さん

この度は尚醸賞を受賞いただけたことを大変光栄に思います。先生方や家族に支えられ、時には友人と切磋琢磨しながら勉学や研究に励んで参りました。その結果、このような形で表彰いただけたことを大変嬉しく思います。今後も社会に貢献できる人材になれるよう日々邁進いたします。



授賞式での記念撮影（写真の左から、福崎幹事長、空田さん、砂さん、関会長、巽さん）

令和4年度工学賞を受賞して

大阪大学大学院工学研究科生物工学専攻 大政研究室
博士前期課程1年 砂和樹（令和5年卒）

この度、令和4年度大阪大学工学賞をいただけたことを誠に嬉しく思います。このような大変名誉な賞を頂けたのは、ご指導いただいた先生方や先輩方、切磋琢磨しながら勉強に励んだ同期、経済的に支えてくれた家族のおかげでございます。心より感謝申し上げます。感謝の気持ちを忘れることなく、これからもより一層研究および勉学に励む所存でございます。

私は現在、大政教授と山野准教授のご指導の下、アデノ随伴ウイルス（AAV）ベクターの生産性の向上のために、AAVベクター生産のトランスフェクションの段階に注目して研究を進めてまいりました。1年間研究を続けて思ったことは、答えのまだ見つかっていないものを自分で解決するのは非常に困難なことであるということです。今まで行ってきた勉強というものは誰かが勝手に問題提起を行ってくれて、答えがすでに導き出されてきており、ページをめくればそれがわかるものでした。また問題は周囲の人と同じもので誰かと相談することができました。しかしながら研究は周りとは違う問題に取り組んでおり自分なりに問題を見つけなければなりません。また周辺の知識も便利な参考書のようなものがあるわけではなく、自分で周辺の知識を整理して問題を解決していかなければなりません。この行為は非常に私にとって難しく実に苦労を重ねた1年でした。しかしながら周りの先生方や先輩方、同期の支えのおかげで少しずつですが自分で物事を整理しながら、問題点を見つけ、解決できるようになっており、非常に私にとって成長できた1年間になりました。ほかにもコミュニケーション能力、資料の作成、語学力などの研究に必要な能力が足りておらず未熟さを痛感しております。日々自分に何が足りていないかを考え成長できるよう日々を過ごして参りたいと考えております。

以上のように、未熟ではありますが1年間周囲の皆様の支えのおかげで成長でき、大変嬉しく思っております。私のこれからの目標は私自身はっきりとしたものはまだありません。しかし自分が身につけた能力で、他人を幸せにできるような人になりたいと考えています。その為に私自身より一層精進を重ねていきたいと考えております。周囲の皆様におかれましてはこれからもご指導ご鞭撻のほどよろしく申し上げます。

令和4年度 尚醸会バイオテクノロジーセミナー報告

庶務幹事 大橋 博之 (平成25年卒)

令和4年度と同窓会総会およびバイオテクノロジーセミナーは、11月12日に開催されました。昨年まではコロナ禍を鑑みてWeb配信のみでの開催でしたが、今年は吹田キャンパス サントリー記念館メモリアルホールでの対面開催と、Web配信を併用したハイブリッド形式で開催いたしました。

総会では、関達治 (S42卒) 会長の挨拶から始まり、福崎英一郎 (S58卒) 幹事長から事業報告、生物工学コースの現状報告、会計報告が行われ、塩屋捨明 (元教員) 監査人により会計監査承認が行われました。協議事項として、塩谷捨明 様の令和4年限りでの監査人退任と、片倉啓雄 (S57卒) 様の監査人就任が審議、承認されました。

バイオテクノロジーセミナーでは、BASF 日本の梶浦智義 (H10卒) 様、立命館大学の梶田美穂子 (H15修士卒) 様からご講演いただきました。梶浦様からは、「リーダーの作法」という演題で、コロナ禍にみられたリーダーシップを入り口とし、ご経験を交えつつ、リーダーに求められる資質について講演いただきました。梶田様からは、「発がんの初期段階に起こる現象の解析 + α 」として、ご自身の研究内容をはじめ、海外経験、アカデミアの歩き方、研究とプライベートの両立など幅広くご講演いただきました。どちらの演題も非常に興味深く、参加者から活発な議論が行われました。



梶浦智義 様

今回、久しぶりに対面形式でもセミナーを開催でき、皆様の懐かしい顔を見ることができました。コロナ禍を経験し、オンラインツールを活用した会議や学会に慣れてしまいましたが、“対面形式ならではの楽しさ”を実感した総会・セミナーでした。とはいえ、引き続きWeb配信も活用し、様々な環境の同窓生に参加していただけるよう取り組んでいきたいと思えます。残念ながら、懇親会は今回も開催できませんでした。令和5年度と同窓会では皆様にご参加いただき、酒を酌み交わしていただければ、と期待しております。



梶田美穂子 様



集合写真

令和4年度尚醸会企画「社会人ドクターから話を聞こう！」開催報告

企画幹事 大阪大学・現教員 新聞秀一

去る2023年3月3日18時よりオンラインにて令和4年度尚醸会企画「社会人ドクターから話を聞こう！」を開催しました。近年、博士後期課程への進学率が伸び悩んでいる一方で、博士前期課程を修了後社会人になり博士後期課程に入学する学生も増えている現状です。そこで、なぜ社会人になり博士後期課程に進学したのか、そのモチベーションを探りたいという思いで企画をさせていただきました。

社会人ドクターは、社会人と学生という2足の草鞋を履いた生活になり、ワークライフバランスをどのようにとっているのかと言う点にもフォーカスを当ててお話を伺いました。参加者は春休みにかかったこともありそれほど多くはありませんでしたが、参加してくれた学生は有意義な時間を過ごせたのではないかと思います。

この企画を通じて、将来博士後期課程入学へのモチベーションが上がることを期待していますし、もちろん、社会人を経ずに修士から直接博士課程に進む学生が増えることも期待しています！

【開催概要】

開催日時：3月3日 18:00～20:00

開催場所：オンライン

開催様式：パネルディスカッションおよびZoomブレイクアウトルームを用いた座談会

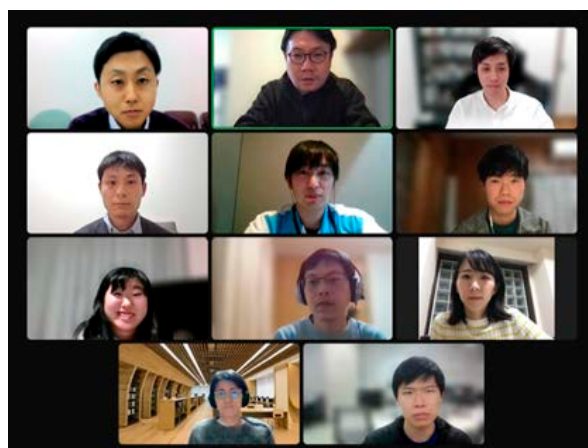
登壇者：玉田佳大 様（白鶴酒造：福崎研究室）

河村和広 様（島津製作所：福崎研究室）

城 慎二 様（大鵬薬品：内山研究室）

佐藤圭悟 様（明治：藤山研究室）

窪村有紗 様（キリン：藤山研究室）



尚醸会企画参加者のスナップショット

旧制大阪大学工学部醸酵工学科昭和 28 年卒業生同窓会（二八会）の松田祥吾様より、札幌農学校でのクラーク博士のエピソードを綴ったエッセイを、若い年代の同窓生への激励も含めてご寄稿いただきました。

クラーク博士とそのひとこと

松田祥吾（旧制昭和 28 年卒）

札幌農学校は未開の新天地であった北海道の教育拠点として開拓使の初代長官・黒田清隆の進言により 1876 年（明治 9 年）に創設された。北海道大学の前身である。アメリカのマサチューセッツ農科大学学長・クラーク博士が招聘され教頭に就任した。彼は幼い時からクリスチャンの両親に厳しく躰けられていた。黒田は「日本では道德教育を特に重視してほしい」と要請し、クラークは「全く同感です」と応じ教育の基本にキリスト教をおきたいと主張した。「異教の耶蘇教を待たむとは何事か！」と黒田は反対し、議論になった。鋭い質問と熱心な説明が繰返され、黒田が初めて聞くその内容には共鳴できるものがあり、殊に基本的な点で武士道と共通する理念を感じ、「これは長官の御方針に合致します」とのクラークの言葉に納得した。クラークが憶することなく自説を主張したのも偉かったし、黒田も良いと思ったことには理解と共感を示す度量があった。

クラークはフロンティアの血を受け継いで逞しい行動力を持っており、神を畏れ形式を排し誠意を尽して学生を指導した。当時の札幌は人口 2,000 余の寒村で学生は全員が寮で暮らすことになった。生活が乱れないように寮生規則を作ることになり、起床・点呼に始まって就寝まで毎日の行動を細かく規制する原案が作られた。クラークはその原案を一目見て「駄目だ！」と反対し、代りにこれでやるようにと示した紙片には唯二文字“Be gentlemen!”とだけ記されており、これが札幌農学校の指導方針となった。

クラークも寮に入り学生と生活を共にした。自分が先頭に立って、なすべきことは先ず自分がやり、なすべからざることは先ず自分がやめた。学生たちが夜、酒やタバコを飲み寮の規律が乱れていくら言っても改まらないことがあった。クラークは全員を集めて飲酒とタバコの弊害を懇々と言い聞かせ、赴任のときアメリカからはるばる持ってきた幾箱ものワインを木箱ごと出して「私は今からこれを飲まないことを皆さんに約束します。だから皆さんもお酒をやめると約束して下さい」と言うなり、学生たちの前でそのワインの壺を全部、叩き割った。ワインはクラークの好物であった。学生がどのように反応したか……禁酒禁煙の誓約が交され、この後、クラークは外部の晩餐会で黒田長官から酒をすすめられても杯を受けず、学生は人間・クラークに次第に引きこまれていった。クラークはさらに自分が日本を去った後のことを考え、「イエスを信ずる者の契約書」を作っヨモノシて先ず自分がそこに署名し、心ある者はこれに応じて欲しいと学生に呼びかけた。土佐出身の黒岩ヨモノシ四方之進がその場でこれに応じ、次々に賛同者が増えて結局全員が署名した。

やがて任期が満ちクラークが札幌を離れる日が来た。明治 10 年 4 月 16 日、当時は鉄道も自動車もなく、乗船地の室蘭へ行く手段は馬だけである。クラークと見送りの学生 16 名は札幌から次の馬継ぎ（宿駅）、島松まで 24 km を馬首を連ねて共に馳けた。島松で少憩の後、いよいよ訣別に当って馬上のクラークは一同を振返ると、ひとこと“Boys, be ambitious!”と言い残すや馬に一鞭くられて残雪のダケカンバの疎林の中を彼方へ馳け去った。このひとことは淋しさに悄然としていた学

生たちの心に深くしみこみ、それ以来、連綿と伝えられて北海道大学の校風―進取・剛健・誠実―を形成する指標となった。

「少年よ、大志を抱け」と訳されている。クラークは何を言いたかったのか？ クラークの甥で彼の性格をよく知っており、後年、北大予科の教師であったポール・ローランドは次のように説明している。

BOYS, BE AMBITIOUS! MESSAGE OF DR. CLARK

Boys be ambitious! Be ambitious not for money or selfish aggrandizement, not for that evanescent thing which men call fame. Be ambitious for knowledge *, for righteousness, and for the uplift of your people. Be ambitious for the attainment of all that a man ought to be. This was the message of William Smith Clark,

BY PAUL ROULAND, 1915

直訳すると次のとおりである。

青年よ、野心を燃やせ！ お金のためでなく利己的栄達のためでもなく、いわんや人呼んで名誉と称する空しいもののためでもない。知識*のため、正義のため、かつ、国民の向上のために野心を燃やせ！ 人として正にかくあるべき姿をすべて達成せんがために野心を燃やせ！ これがウィリアム・スミス・クラークが言いたかったことである。

東北帝国大学北海道農科大学予科

教師 ポール・ローランド 1915年（大正4年）

Knowledge *は本来、「善悪を識別する知的活動」を意味する。Be ambitious!（大志を抱け！）では逞しさがないので「野心を燃やせ！」と改めたがまだ迫力が足りない。読みとるべきはその内容であり、さらに感じとるべきは満々たるその覇気である。札幌農学校はこのようにクラークによってその基礎が固められた。

クラークは今から140数年前、日本の青年を教育するため遠路アメリカから来日した。彼の就任演説の言葉を借りれば「嵩高なる野心（lofty ambition）」に燃えてこの遠い日本へやって来た。彼の野心は学生たちに燃え移り多くの人材が巣立ってあのひとことを守り、明治日本の発展のため大きく貢献されたことは衆知の通りである。その人々の中、私の記憶にある方として次の諸氏を列記したい。

黒岩四方之進・内田^{キヨシ}清・田内^{ステロク}捨六（以上三名、土佐出身）、

新渡戸稻造・内村鑑三・宮部金吾・大島正健・佐藤昌介・有島武郎

近年、世相は濁りを深めている。国際的に名を知られた大会社が自社の業績を粉飾したり、製品性能を過大表示するなどの不祥事件が続出している。顧客や株主、あるいは監督官庁に対して平然と嘘をついている。類似の事件は以前もあったが大抵それは政界であり数年に一度であった。最近それは経済界・産業界を始め各界に拡がり頻発している有様は異様である。正邪善悪の区別がつかない人が各界の幹部に少なからず実在している。マスコミの取扱い方もこれを咎めたり追求しようとする迫力が乏しく、簡単に報道するだけですませており世の中の善悪観念が狂ってしまったとしか言いようがない。

どうすべきか？考えるまでもない。人として当然しなければならないことを守る、唯それだけのことであろう。少なくとも旧帝国大学で学ぶ人、学んだ人は正しい心を堅持し精神的コンタミを排除して頂くよう切にお願いしたい。阪大工学部応生の皆さん！ **Be ambitious!!**

(参考)

1. ウィリアム・スミス・クラーク (1826 ~ 1886) : 植物学を専攻。
ドイツ・ゲッチンゲン大学にて学位を取得。
2. あきない風土記 北海道開拓史の土佐人たち 西沢弘順 著 (文理閣)
3. 関西エルム新聞 北海道大学関西同窓会々報 1995年5月号
4. 北大学生新聞 1997年5月21日
5. 恵 迪・北海道大学恵迪寮同窓会 2001年9月15日
6. 北海道新聞 2023年4月2日

以上

令和4年度 同窓会会計

収入	令和3年度より繰越金	2,955,928 円
	令和4年度年会費	551,000 円
	寄付	22,000 円
	受取利息	22 円
	合計	3,528,950 円
支出	名簿データ整理委託費	66,550 円
	会報作成費	420,900 円
	尚醸賞賞状・楯作成費	18,117 円
	ゆうちょ Biz 利用料	13,200 円
	利用料（ゆうちょ銀行）	1,320 円
	合計	520,087 円
収支	（令和4年度への繰越金）	3,008,863 円

令和4年度 学生国際活動支援金会計

収入	令和3年度より繰越金	3,439,043 円
	受取利息	30 円
	合計	3,439,073 円
支出	無し	0 円
	合計	0 円
収支	（令和5年度への繰越金）	3,439,073 円

証明書

令和四年度大阪大学工学部醸造醱酵応用生物工学科同窓会（尚醸会）の会計資料（収入・支出内訳、領収書、預金通帳）および、学生国際活動支援基金の会計資料（収入・支出内訳、領収書、預金通帳）を監査したところ、正当妥当であることを証明します。

令和五年 4 月 28 日

大阪大学工学部醸造醱酵応用生物工学科同窓会（尚醸会）
会計監査人

Web 版のため印章部分を削除いたしました。

証明書

令和四年度大阪大学工学部醸造醱酵応用生物工学科同窓会（尚醸会）の会計資料（収入・支出内訳、領収書、預金通帳）および、学生国際活動支援基金の会計資料（収入・支出内訳、領収書、預金通帳）を監査したところ、正当妥当であることを証明します。

令和五年 5 月 1 日

大阪大学工学部醸造醱酵応用生物工学科同窓会（尚醸会）
会計監査人

Web 版のため印章部分を削除いたしました。

大阪大学工学部 醸造・醱酵・応用生物工学科同窓会「尚醸会」会則

1. (名称)

本会は「尚醸会」と称する。但し、本会の預金口座名は「醸造・醱酵・応用生物工学科同窓会」として取り扱うものとする。

2. (会員の構成)

本会は次の会員で構成する。

(1) 正会員

イ 大阪大学工学部，同大学大学院工学研究科ならびにその前身である学校の醱酵・生物工学系の前身学科、専攻の卒業生。

ロ 上記イの教室および付則に示す関連講座の旧教官・教員、現教員および現職員。

ハ 上記イの教室および付則に示す関連講座に関係のあるもの（旧職員、研究生、実習生など）で、入会を希望し会長が承認したもの。

(2) 名誉会員

会員の中から第6条に定める役員会の推薦により総会の承認を得たもの。

(3) 賛助会員

本会の趣旨に賛同し、付則に定める会費を納めるもので幹事会の推薦により総会の承認を得たもの。

(4) 学生会員

大阪大学工学部応用自然科学科バイオテクノロジーコースおよび同大学院工学研究科生物工学専攻生物工学コースに所属する学生。

3. (目的)

本会は会員相互の親睦を図り教室の発展に寄与することを目的とする。

4. (所在地)

本会の所在地は大阪府吹田市山田丘2番1号大阪大学大学院工学研究科生物工学専攻内とし、会員の希望により支部を設けることができる。

5. (役員)

本会には次の役員を置く。

- | | | |
|---------|-----|------------------------|
| (1) 会長 | 1名 | 正会員の中から総会で選出する。 |
| (2) 副会長 | 2名 | 正会員の中から会長が推薦し、総会で承認する。 |
| (3) 幹事長 | 1名 | 正会員の中から会長が委嘱する。 |
| (4) 幹事 | 若干名 | 正会員の中から会長が委嘱する。 |
| (5) 監査 | 2名 | 正会員の中から総会で選出する。 |

6. (役員の仕事)

本会役員は、役員会を構成し、本会の運営を図る。役員の仕事は次のとおりである。

- (1) 会長は本会を総理する。
- (2) 副会長は会長を補佐する。
- (3) 幹事長は幹事を総括して会務を掌理する。

- (4) 幹事は庶務、財務、企画、編集の事務を行う。
- (5) 監査は本会の運営と会計を監査し、総会に報告する。
- 7. (役員任期)
役員任期は2年とし再任を妨げない。
- 8. (名誉会長)
 - (1) 本会に、名誉会長をおくことができる。
 - (2) 名誉会長は役員会が推薦し、総会の承認を得て委嘱する。
- 9. (会議)
 - (1) 本会は原則として2年に1回総会を開き、役員改選、会計報告、会則改正、その他重要な事項を議する。
 - (2) 総会の議決には出席正会員の過半数の賛成を必要とする。
- 10. (会計)
 - (1) 本会運営の経費は会費およびその他の収入を持ってあてる。
 - (2) 会費は付則に定める金額とする。
 - (3) 名誉会員および学生会員からは徴収しない。また、卒業後50年以上の会員は会費を免除する。
 - (4) 本会の会計年度は4月1日に始まり翌年3月31日に終わる。
- 11. (会則変更)
本会の会則は総会において出席正会員の三分の二以上の賛成を得て改正することができる。ただし、書面を持って賛否を表す場合は出席とみなす。

付則

- 1. 本会の設立日は平成8年11月15日である。
- 2. 生物工学系とは、大阪大学工学部応用自然科学科バイオテクノロジーコースおよび同大学院工学研究科生物工学専攻生物工学コースならびに、それらの前身とする。関連講座については、適宜役員会で協議の上、定義する。
- 3. 本則第9条の会費は次のとおりとする。
会費 正会員は年額2,000円、賛助会員は年額1口 5,000円。
- 4. 本則第4条の規定に従い、本会に関東支部を置く。
- 5. 付則の変更は役員会の議をもって行う。
- 6. 本会則は平成8年11月15日から施行する。

令和3年11月13日改訂

☆同窓会現組織（令和 5 年度）

会長	関 達治（昭和 42 年卒）
副会長	二宮保夫（昭和 46 年卒） 原島 俊（昭和 47 年卒）
幹事長	福崎英一郎（昭和 58 年卒）
幹事	
（企業幹事）	櫻井崇弘（平成 17 年卒） 日本盛（株） 谷口百優（平成 28 年卒） 島津製作所（株） 中島慎太郎（令和 2 年卒） 武田薬品（株）
（庶務担当）	梶浦 裕之（平成 15 年卒）、岡橋伸幸（平成 24 年卒）、 安本周平（平成 24 年卒）、大橋博之（平成 25 年卒）
（財務担当）	鳥巢哲生（現教員）、酒井香奈江（平成 15 年卒）
（名簿担当）	大政健史（昭和 61 年卒）、内山 進（現教員）、 Sastia Putri（平成 22 年英語コース卒）
（編集担当）	山本 陸（平成 27 年卒）、加藤泰彦（現教員）、戸谷吉博（現教員）
（企画担当）	新聞秀一（現教員）、櫻井崇弘（平成 17 年卒；企業幹事兼）、谷口百優 （平成 27 年卒；企業幹事兼）、中島慎太郎（令和 2 年卒；企業幹事兼）
監査	高松 智（昭和 44 年卒）、片倉啓雄（昭和 57 年卒）

☆会員の動向（最近の動向がございましたなら、同窓会までご一報下さい）

●教職員の異動（令和 4 年 8 月から令和 5 年 6 月まで）

Web 版では個人情報保護のため削除いたしました。

●会員訃報 心よりご冥福をお祈り申し上げます。

Web 版では個人情報保護のため削除いたしました。

●令和5年3月卒業、修了生進路等（工学研究科教務係提出資料より）

Web版では個人情報保護のため削除いたしました。

同窓会からのお願い

近年、企業合併や部署移動、市町村合併によって、住所変更や所属変更となる会員が増えておられます。これらに変更が生じた場合、同窓会（doso@bio.eng.osaka-u.ac.jp）までご一報ください。なお、お寄せ頂いた個人情報は、尚醸会個人情報保護方針（<https://www-bio.eng.osaka-u.ac.jp/doso/jusho.html>）に従い、適切に対応いたします。

●教室の構成

Web 版では個人情報保護のため削除いたしました。

●クラス会幹事（クラス会幹事の方には会員の所属の移動等について同窓会への連絡をお願いいたします）

昭和 23 年	佐瀬 勝	昭和 48 年	曾根良昭	平成 10 年	田中礼央
昭和 24 年	野口祐一	昭和 49 年	小西喜朗	平成 11 年	永塚由佳
昭和 25 年	足立 有	昭和 50 年	中塚正博	平成 12 年	井戸芳博
昭和 26 年		〃	東浦忠司	平成 13 年	後藤優治
昭和 27 年		昭和 51 年	溝口晴彦	平成 14 年	有岡伸悟
昭和 28 年（旧制）	石川正人	昭和 52 年	根来誠司	平成 15 年	新家康弘
昭和 28 年（新制）	高野光男	昭和 53 年	金子嘉信	平成 16 年	和田 悠
昭和 29 年	嶋谷幸雄	昭和 54 年	高木 睦	平成 17 年	藤井健治
昭和 30 年	大嶋泰治	昭和 55 年	滝沢 昇	平成 18 年	鳳桐智治
昭和 31 年		昭和 56 年	阿野貴司	平成 19 年	高木康弘
昭和 32 年	細見正明	昭和 57 年	片倉啓雄	平成 20 年	木村修一
昭和 33 年	中桐義隆	昭和 58 年	森川正章	平成 21 年	外尾竜太
昭和 34 年	野本哲也	昭和 59 年	藤山和仁	平成 22 年	井村 誠
昭和 35 年	森元英雄	昭和 60 年	中嶋幹男	平成 23 年	吉田真理
昭和 36 年		昭和 61 年	大政健史	平成 24 年	吉田隆史
昭和 37 年	菅 健一	昭和 62 年	山本恵三	平成 25 年	長澤宏器
昭和 38 年		昭和 63 年	向由起夫	平成 26 年	都倉知浩
昭和 39 年	藤田正憲	平成元年	永尾寿浩	平成 27 年	小幡佑季
昭和 40 年		平成 2 年	松本雄大	平成 28 年	吉富耕太
昭和 41 年	関 達治	平成 3 年	鈴木市郎	平成 29 年	花谷耀平
昭和 42 年	卜部 格	平成 4 年	内山圭司	平成 30 年	光吉祐太郎
昭和 43 年	関口順一	平成 5 年	滝口 昇	平成 31 年	有島凜太郎
昭和 44 年	土戸哲明	平成 6 年	松浦友亮	令和 2 年	黒田将輝
昭和 45 年	古川憲治	平成 7 年	永久圭介	令和 3 年	安倍 玲
昭和 46 年	山本忠行	平成 8 年	金谷 忠	令和 4 年	川本優一
昭和 47 年	島田裕司	平成 9 年	小林 肇	令和 5 年	川西寿和

- * 昭和 22 年以前は、クラス幹事不在のため省略しております。
- * クラス幹事が不在の学年は、ご相談の上、同窓会事務局までお知らせください。
- * 各学年での同窓会等の行事を開催した場合は、是非同窓会までご一報ください。その際には、簡単な概要説明と写真などを添えて頂けると幸いです。

会員各位

名簿担当からのお知らせとお願い

①大阪大学生涯メールアドレスをお知らせください。

大阪大学を卒業・修了された方に、生涯使えるメールアドレス「XXXX @ alumni.osaka-u.ac.jp」が大阪大学から提供されています。大阪大学の Web メールシステム (OUMail) を用い、インターネット環境下ならどこでも送受信でき、自動転送設定も可能です。

平成 26 年 3 月以降の卒業・修了生＝すでに利用可能です

卒業・修了時、全員に OUMail 生涯メールアドレスが設定されています (申し込み不要)。

アドレスは、卒業の翌月初めに、在学中の大阪大学個人 ID をもとに自動で切り替わっています (例: u123456a@ecs.osaka-u.ac.jp ➔ u123456a@alumni.osaka-u.ac.jp)。

※在学中のパスワード、メールデータ、連絡先などの設定は自動で引き継がれます

※大阪大学の中で進学される方には、その課程を修了後に贈呈します

平成 26 年 2 月以前の卒業・修了生＝新規発行となります

アドレスは、申込者の氏名に基づき、下記の形となります。

【姓 - 名 - 英字 2 字 (自動割り当て)】@alumni.osaka-u.ac.jp

申し込み等、詳細は下記の大阪大学の HP をご参照ください。

(<https://www.osaka-u.ac.jp/ja/campus/alumni/support/oumail>)

なお、生涯メールアドレスを取得された後、doso@bio.eng.osaka-u.ac.jp にもアドレスをお知らせ頂ければ幸いです。尚醸会からの同窓会案内等を当該アドレスにお送りさせていただきます。

②個人情報保護法の改正について

個人情報保護法の改正にともない、尚醸会の管理する個人情報も当法案の対象となりました。尚醸会では、すでにプライバシーポリシーを設定 (2009.11.13) しており (<https://www-bio.eng.osaka-u.ac.jp/doso/kojin.pdf>)、改正された個人情報保護にも対応しておりますのでご安心ください。

令和5年度会費の納入をお願いします

会員各位

拝啓、ますますご清祥のことと拝察します。

ご承知のとおり本会は皆さまの会費で運営を行っております。つきましては皆さまに会費の納入を是非ともお願いする次第です。

なお、下記要領で令和5年度会費の納入をお願いしております。

記

1) 払込用紙にて納入される場合

同封の払込取扱票を用いて、郵便局、コンビニエンスストアにてお振込下さい。今年度より、郵便局だけでなくコンビニエンスストアでもお振込いただける振込用紙を同封しております。用紙の変更に伴い、手数料(198円)込の金額を表示するようになっておりますが、会費(一口2,000円)に変更はありません。複数口納入いただく場合は、これまで通り郵便局でのお振込をお願いいたします。

(郵便局でのご記入内容)

払込先口座番号：00920-5-83256

払込先加入者名：阪大工醸造醗酵応生同窓会

金額：2,000円

2) 郵便貯金口座自動払込を申し込まれる場合

最寄郵便局で自動払込利用申込書に必要事項を記入の上、お申し込み下さい。

今後、毎年11月30日に貴口座より、年会費2,000円を自動引き落としさせていただきます。手続きの都合上10月15日までにお願ひ申し上げます。

(ご記入内容)

払込先口座番号：00920-5-83256

払込先加入者名：阪大工醸造醗酵応生同窓会

払込開始月：令和5年11月から

払込日：30日

払込の種別：会費

(注：昨年度すでに自動払込申込をされた方は新たな手続きは不要です。

自動払込手続をされた方は振込用紙で振り込まないようご注意ください。)

♪♪♪♪♪ 同窓生のみなさまへ会費免除のお知らせ ♪♪♪♪♪

いつも会費納入にご協力いただきまして誠に有り難う御座います。

同窓生のみなさまは卒業後50年経過しますと会費免除となります。

令和5年度は昭和48年卒の同窓生が該当致します。会誌送付や諸行事への参加などは今までと変わりありません。今年から免除になられた同窓生及びすでに免除になっておられる同窓生の皆様には、長い間会費を納入していただきまして有り難う御座いました。今後も同窓会へのご支援・ご協力のほど宜しくお願い致します。



大阪大学工学部 醸造・醗酵・応用生物工学科

同窓会会報 第26号

令和5年9月15日 発行

印刷所 中西印刷

発行人 同窓会幹事長 福崎 英一郎 (昭和58年卒業)

〒565-0871

吹田市山田丘2-1

大阪大学大学院工学研究科生物工学専攻内

ホームページ

<https://www-bio.eng.osaka-u.ac.jp/doso/>

電子メール

doso@bio.eng.osaka-u.ac.jp